



### ▼ イン트로ダクション

長い年月によって古び、壊れたオルゴール  
その外箱には、青い薔薇が描かれている  
青い薔薇の花言葉は、「不可能」「奇跡」

季節は初秋

赤い彼岸花が咲く中で

物語のゼンマイは再び廻り始める

エモクロア TRPG「青薔薇と彼岸花の円舞曲」

### ▼ シナリオコンセプト

掃除をしている最中。共鳴者はオルゴールを  
発見する。木製の外箱には、青い薔薇が描かれ  
ている。古びていて、ゼンマイを回しても歪な  
旋律が流れるだけ。共鳴者は修理のため、オル  
ゴールの産地へと向かう。旅先で共鳴者は、オル  
ゴールに隠された物語を知る。

### ▼ ダイスタス・コモンズ



### ▼ シナリオ情報

物語の舞台：現代・日本

人数：1人推奨

プレイ時間：4～5時間

共鳴者：継続・新規どちらでも可

ロスト率：無し(後遺症の可能性はあり)

### ▼ ハンドアウト

#### 共鳴者①

あなたは、幼少期から古びたオルゴールを所  
有していた。自身がオルゴールを所有した経緯  
については、よく覚えていない(もしくは全く覚  
えていない)。古びたオルゴールを手に取り、ゼ  
ンマイを回すが壊れている。オルゴールに興味  
を持ち、修理の為に出かけることになる。

#### 共鳴者②以降

共鳴者①の友人、家族、恋人、何でもよい。  
泊りがけの旅行に出かけることになる、共鳴者  
①について行くことが出来て、一緒に行動する  
ことに違和感が無ければ良い。

## シナリオ核心情報

- 以下は、DL 向けの情報である。
- シナリオ本文のロールは、あくまで一例である。下記の情報を参考に、自由にアレンジして演出やロールを行うと良い。
- 判定に関しても、同上である。適宜、判定を追加すると良い。

### ▼ ストーリーの背景

共鳴者は自宅で、青い薔薇が描かれたオルゴールを発見する。このオルゴールの正体は、1870 年にフランスで作成され、「ブルーローズ」と呼ばれたものである。

ブルーローズを作成したフランス人、「カリヨン・ラジアータ」は、ブルーローズを心から大切にしていた。毎晩のように音色を楽しみ、手入れを欠かさなかった。そんなカリヨンの想いはブルーローズに魂を与え、「ローズ・アルモニカ」という精霊(日本でいう付喪神)を生み出した。その力は次第に強まり、カリヨンにはつきりと姿を見せ、会話ができるようになった。

機械技師であったカリヨンは、その腕を明治政府に買われ、1875 年にお雇い外国人として日本へと入国した。山響町に住み、仕事の片端に蓄音器やオルゴールの作成を楽しんでいた。カリヨンと共に日本へ来たローズも、主に大切されながら、静かな日々を過ごしていた。

ある日、カリヨンは山響町の東部に位置する蒼響山に眠る、豊富な鉱山資源を発見。富国強兵・殖産興業を目指す政府指導の下、鉄・銅・石炭の採掘事業を開始する。

鉱山の事業は軌道に乗り、カリヨンは豊富な資金を獲得。豊かに暮らしていたが、平穏な日々は終わりを迎えることになる。

鉱山事業を開始してから 1 年後。山響町内に異変が発生する。田畑で作物が枯れ、芽を出さ

なくなる。町内を流れる河川に浮かぶ多くの魚の死体。葉を落とし、倒れ朽ちてゆく蒼響山の木々。原因は、鉱山から流出する鉱毒である硫酸銅と、鉱山近郊に建てた工場から出る排ガスであった。

被害が拡大してゆく中、鉱毒による死者も発生する。最も鉱毒に近いところで生きていた、鉱山で働く作業員の数名が病に倒れた。鉱山が閉山するまでに、鉱毒の吸引による病によって、100 名近くが無くなる惨事となってしまった。

この事実が気が付いたカリヨンは、すぐさま鉱山を閉山するよう政府に訴えた。しかし政府は、多くの資源を生み出す蒼響山の鉱山を閉じるべきではないと判断。些細な被害よりも国家の利益を優先し、営業を続けるようカリヨンに命じた。

鉱毒の被害は拡大し続け、町民からのカリヨンに対する風当たりは強くなる。一般国民にとって科学知識が普及していない当時、枯れる山と田畑は西洋の呪術による仕業という迷信が広がる。鉱山の廃液は鉱山で命を落とした者の怨念が込められており、怨念により田畑や山林が枯れているとされたのだ。

迷信は広まり続け、「新たな西洋の技術＝呪術」という認識が町民に根付く。そして、オルゴールや蓄音機にも迷信が生まれることとなる。それは、「オルゴールの高音は脳を振動させ、精神を蝕み病に陥らせる」というものだった。カリヨン自身にも、「オルゴールで鉱山職員を死に至らしめ、その恨みを原動力に機械を動かしている」という噂が囁かれるようになった。

カリヨンは政府に鉱山事業を停止するよう訴え続けるも、その意思は退けられる。そんな中でも住民からのカリヨンへの恨みは積もり続ける。カリヨンは政府と住民の板挟みになった。

鉱山事業を開始してから5年後、1895年の秋。鉱山付近の泉にカリヨンの遺体が浮かんでいるのを、作業員の1人が発見する。遺体の後頭部には大きな傷があり、撲殺とされている。犯人は現代まで明らかになっておらず、恨みを持った町民の犯行とも、鉱毒の情報が広がることを恐れた政府による口封じともされている。

カリヨンの死亡によって、ブルーローズに宿る精霊であるローズは永い眠りにつく。カリヨンの死によってショックを受け、力を消耗してしまったが故の結果だった。

カリヨンが死亡した年の冬。山響町内で住民による暴動が発生する。「忌まわしき西洋人の呪術を排除せよ」として、鉱山の閉山、ガス灯などの西洋技術の排斥を求め、西洋人の住居や交番、町役場などが襲撃された。

襲撃の対象はカリヨンの邸宅も例外ではない。誰も住まず空き家となっていた彼の家には火が放たれ、多くの貴重なオルゴールや蓄音機が失われた。そんな最中、カリヨンが大切にしていたブルーローズだけは守ろうとした人物がいた。

カリヨンの執事であった「藤 弦一郎」と、カリヨンからオルゴールの技術を学んでいた弟子「虎杖 伝作」である。彼らは2人で協力し、燃えるカリヨンの住居からブルーローズを救出。住民の目から逃れるため、山響町の外へと持ち出し、虎杖 伝作の友人に保管を依頼した。その友人は、共鳴者の先祖にあたる。

その後、長い年月を経て共鳴者の家にまでブルーローズは引き継がれた。人に触れられることもなく、ずっと奥に仕舞われていた為、ローズは精霊としての力を失っていった。

人々から忘れ去られ、ひっそりと眠っていたブルーローズ。そんなオルゴールを共鳴者が発見する場面から物語が始まる。僅かに残っていた精霊の力が共鳴を引き起こし、共鳴者をオルゴールの修理へと導くことになる。

## ▼ 怪異「ローズ・アルモニカ」

オルゴール「ブルーローズ」の精霊。オルゴールが大切に扱われたが故に宿った存在であり、オルゴールの付喪神のような存在。

ローズは、人に大切にされることによって力を得る事が出来る。カリヨンの死後、ほとんど人に触れられなかったローズは、力を失い眠りについていた。

義理堅く、礼儀正しい。口調はお嬢様言葉。一人称は私(わたくし)。

共鳴感情：[孤独(傷)][情景(理想)][愛(関係)]

### ● ローズの想い

カリヨンが死亡してから100年以上経過した今も想っている。

カリヨンの死後の記憶は、大半が失われている。自身がなぜカリヨンの手元を離れ、共鳴者の元に移ったのかも覚えていない。

(力を失い眠りにつき、意識すらなかった。)

そのため、カリヨンの死後は自分自身が忘れ去られ、どこかに売られてしまったのでは無いかと思っている。



### ● オルゴール「ブルーローズ」の詳細

「ブルーローズ」はお雇い外国人の「カリヨン・ラジアータ」が日本に持ち込んだ、30cmほどのオルゴール。外箱に青いバラが描かれていることから、「ブルーローズ」と呼ばれていた。

鍵盤部分には、蒼鉄鉱という青く輝く鉱石が用いられている。「蒼鉄鉱を用いた道具には、魂が宿る」という言い伝えが残っている。

「ブルーローズ」が奏でる音楽は円舞曲(ワルツ)であった。その音色は、青い薔薇の花言葉『不可能』『奇跡』に例えられ、『二度と作ることができない、唯一無二の奇跡の音色』と称されていた。

## ▼ ローズ・アルモニカの共鳴表

このシナリオでは以下の共鳴表を用いる。なお、共鳴表を用いない場面がいくつか存在する。(その場合、シナリオ本文に記載あり。)

### 1. ハミング

どこからか、少女のハミングが聞こえる。恐怖を感じることは無く、癒されるような音色だ。

### 2. 少女の影

オルゴールの傍に、黒い人影が見える。まるで、ドレスを着た少女が佇んでいるようだ。共鳴者の〈★靈感〉レベルが1上昇する。

### 3. 青薔薇の記憶

共鳴者は時折、かつての山響町の町並みの幻影が見えるようになる(どのような光景かは DL が決める)。加えて、共鳴者の〈専門知識：歴史〉レベルが1上昇する。幻影に対して判定を行うことで、情報を得ることが可能。

### 4. 共振「哀しみ」

オルゴールから、「もう、取り残されたくない。」という思いが伝わってくる。共鳴者はこのシナリオ中、**共鳴感情：[哀しみ(情念)]**を所持する。

### 5. 共振「情景」

オルゴールから、「また、音楽を奏でたい」という思いが伝わってくる。共鳴者はこのシナリオ中、**共鳴感情：[情景(理想)]**を所持する。今後、**【精神】**を用いる技能の判定値を2上昇する。

### 6. 共振「愛」

オルゴールの奥底から、「あの人は、私を大切にしてくれた。」という思いが伝わってくる。共鳴者はこのシナリオ中、**共鳴感情：[愛(関係)]**を所持する。今後、他者を思って行動した場合、技能の判定値を2上昇する。

## ▼ 怪異「蒼鉄鉱」

山響町の西部に位置する蒼響山で産出することがある鉱石。人の感情や思念を増幅させる特異な性質を持つ。

感情を具現化する形質も持ち合わせている。強い感情がこの鉱石に流れ込むと、新たな怪異を生み出すことがある。幸せな感情であれば精霊を生み出したり、負の感情であれば悪魔や怨霊を生み出したりすることがある。

作中のローズ・アルモニカは、カリヨン・ラジータのオルゴールを愛する感情から生まれている。下記の地縛霊は、鉱毒によって命を落としたことによる恨みや恐怖の感情から生まれている。



## ▼ 怪異「蒼鉄鉱山の地縛霊」

シナリオ中盤、シーン8にて登場する。

かつては、蒼鉄鉱山の作業員であった。鉱山内で鉱毒を吸い込んだが故に病を患い、亡くなってしまった。

人の思念や感情を増幅、あるいは具現化させる効果を持つ蒼鉄鉱。坑道内に残っていた蒼鉄鉱の結晶に、坑道内で亡くなった魂の負の感情・恨みの感情が流れ込む。その結果、蒼鉄鉱は坑道内に地縛霊を生み出した。

自我を失った怨霊であり、自身がなぜ亡くなったのか、そもそも自分自身が何者であったかも覚えていない。

蒼鉄鉱の結晶と一体化しており、作中では共鳴者を蝕むこととなる。蒼鉄鉱の結晶に別の思念を流し込むことで、結晶内の負の感情を上書きし、地縛霊を消滅させることが可能。

**共鳴感情：[恨み(情念)]**



## ▼ 登場人物

### ● 藤 弦蔵(ふじ げんぞう)

山響町の洋食屋「ワルツ」の店主。男性で年齢は75歳。かつてカリヨンに仕えていた執事「藤 弦一郎」の子孫。

カリヨンや弦一郎のことに關しては、ある程度知っている。ブルーローズに關しても、自身の親から話を聞いたことがある。

気さくな性格で、朗らかな接客態度から、店は繁盛している。料理の腕前も一級品。

なお、店の名前の由来は、ブルーローズがワルツを奏でていたことに由来する。

### ● 藤 芳子(ふじ よしこ)

山響町の骨董堂「メメント・モリ」の店主。女性で、年齢は86歳。上記の弦蔵とは、少し離れた親戚にあたる。カリヨンや自身の先祖である弦一郎のことに關しては、ほとんど何も知らない。

物を大事にする性格。長く大切にされたものには、魂が宿る(付喪神)と考えている。

### ● 虎杖 博音(いたどり ひろと)

山響町の時計堂「リコリス」の店主。かつて、カリヨンに仕えていた執事「虎杖 伝作」の子孫にあたる。カリヨンや自身の先祖については、先代から話を聞いている。

礼儀正しい口調が特徴。先代から時計作成の技術だけではなく、オルゴールの作成・修理に關する技術も受け継いでいる。

なお、店名の「リコリス」に由来は、カリヨンが好きだった「彼岸花」の英名「Licorice」に由来している。

## 補足年表

年表	
1845年	カリヨン・ラジアータ、フランスで誕生。
1870年	カリヨン、「ブルーローズ」を制作。カリヨンが毎日大切に扱う中で、ブルーローズに精霊が宿る。
1875年	カリヨン、明治政府にお雇い外国人として雇用される。ブルーローズを持って日本へ。山響町に住み始める。
1876年	カリヨン、執事の藤 源一郎と弟子となる虎杖 伝作と出会う。
1890年	カリヨン、山響町東部の蒼響山にて銅や鉍脈を発見。その年の冬から鉍山としての操業を開始。
1891年	鉍山の鉍毒被害が発生。田畑が枯れ、川から魚がいなくなる。この年の冬には鉍山の作業員から病に倒れる者も。カリヨンへの風当たりも強くなり始め、村八分のような状態に。
1895年秋	鉍山付近の泉にカリヨンの遺体が発見される。ブルーローズの精霊は力を失い、眠りにつく。
1895年冬	山響町内で西洋技術排斥運動が発生。鉍山、西洋人の住居などが襲撃を受ける。カリヨンの執事の弦一郎と弟子の伝作が、燃えるカリヨン邸からブルーローズを他の町へ移動させる。共鳴者の先祖の家系へ。
1896年	藤 弦一郎、洋食屋「ワルツ」を創業。虎杖 伝作、時計堂「リコリス」を創業。
1950年	藤 弦一郎の子孫の1人が、骨董堂「メメント・モリ」を創業。
現代	共鳴者が自宅に眠っていたオルゴールを発見。シナリオが開始。

# シナリオ本編

## シーン 1：古びたオルゴール

季節は秋の初め頃。あなたは、自宅で大掃除をしている所である。断捨離といった方がよいかもしれない。押し入れに入ったモノを取り出し、整理してゆく。

(共鳴者によっては実家の方が違和感ないかも。)

そんな中、埃っぽい段ボールを発見する。段ボールを開けてみると、幼少期に遊んでいた、おもちゃや道具が入っている。どうやら、捨てられずに保管されていたようだ。

段ボールの奥に、古びた木箱が入っている。箱の表面には、青い薔薇の花が描かれているが、かすれて見えかかっている。

- 〈\*知覚〉〈鑑定〉などで判定

**判定に成功**した場合。箱を開くと、内部に錆びた金属の鍵盤やゼンマイが見える。どうやらこれは、オルゴールのようだ。加えて、「1870」「Carillon Radiata」という2つの刻印を発見する。刻印はすり減り、消えかけている。

**判定に失敗**した場合。箱を開くと、内部に錆びた金属の鍵盤やゼンマイが見える。どうやらこれは、オルゴールのようだ。

共鳴者は、このオルゴールに見覚えがある。幼少期にどことなく惹かれ、手にして遊んだ覚えがある。しかし、どこで入手したかは覚えていない。

共鳴者がオルゴールを手にし、ゼンマイを回すと、何やら途切れ、ノイズ交じりのメロディーが流れる。原曲が分からないほど壊れたメロディーから、何処か哀愁を感じる。

### ▼共鳴判定

(強度 = 6 / 上昇 1) ∞ 共鳴感情 : [孤独(傷)] [情景(理想)]

**判定の成否に関わらず**、このオルゴールが「修理してほしい」という感情を抱いているような気がする。**判定に成功**した場合は、更に「もう一度、音楽を奏でたい」という、思いが流れ込んでくる。

あなたは不思議に思いながらも、ひとまず掃除を終わらせる。その後、オルゴールの修理を思案する。修理のために動いたり、オルゴールの出どころについて調べたりすることが可能。

- 共鳴者の家族に尋ねた場合

両親や祖父母がいるのであれば、オルゴールについて尋ねることが可能。

「オルゴール？ ああ。あったね。」

「あなたが小さい頃。3 歳ぐらいの頃かな。よく、そのオルゴールを眺めていたよ。もう覚えてないかもしれないけど…。」

「どこで手に入れたか…？ よくわかってないけど、かなり古いみたいだよ。あなたのお祖父さんより前かな。昔うちの先祖が、友人から譲り受けたんだったかな。」

- 「Carillon Radiata」という刻印について

図書館やインターネットで、「Carillon Radiata」について調べると。「カリヨン・ラジアータ」という人物についての情報を発見することが可能。

「カリヨン・ラジアータ」は、1845 年産まれの機械技師。お雇い外国人として、1875 年に日本に入国した。入国後は山響町に住み、仕事の傍らに、蓄音機やオルゴールの製造を行っていた。

- オルゴールを時計屋などに持ち込む  
オルゴールを修理しようと、博物館や時計屋などの専門家の元に持ち込むと。専門家はオルゴールを鑑定した後、以下の情報を教えてくれる。  
「修理を試みたんですが…ウチでは難しいですね。このオルゴール、かなり特殊です。」  
「山響式オルゴールと呼ばれるものです。その名の通り、かつて山響町という町で生産されていたものです。」  
「現在はほとんど生産されていません。直接、山響町に住む職人さんを訪れてみてはいかがでしょう。」
- 山響町について  
山響町は、四方を山に囲まれた田舎町。この町には、明治・大正時代の建築物が残っている。近年では、豊かな自然とモダンな建築物が、観光地として注目されている。  
なお、山響町は共鳴者の住む地域から離れている。鉄道で向かうことが出来るが、日帰りで行くことは難しい。

## シーン 2：山響町へ

オルゴールの調査を終えた夜。  
共鳴者①は、ある夢を見る。(他の共鳴者が同じ場所で寝ているなら、その共鳴者も。)  
(この日の時点で、共鳴者が山響町へ向かおうとしていた場合も、同じ夢を見る。)

### ▼共鳴判定

(強度=5/上昇1)∞共鳴感情:[孤独(傷)][情景(理想)]

判定の成否の関わらず、煉瓦で建てられた、モダンな町並みを歩く夢を見る。町並みの向こうには、山がそびえている。共鳴者は、この風景が山響町であると直観することが出来る。

**共鳴判定に成功**した場合。上記の夢に加え、目が覚めると何故かオルゴールが共鳴者の枕元に置かれている。夢はオルゴールが見せていたものだと直観する。

強い思いを感じ取った共鳴者は、「このオルゴールを修理しなければならない」という気持ちが湧き上がってくる。

オルゴールの修理や、オルゴールの謎の解明を望む共鳴者は、山響町への旅行へ向かうことになる。(夢を見た当日に出発でも、後日出発のどちらでも構わない。)

※因みに、旅の準備の描写を入れるのであれば、田舎である山響町内にホテルが1つしかないことを伝える。因みに、ホテル名は「クロックワーク」である。

身支度を済ませ、共鳴者は山響町への旅に出る。自宅を出て、駅へと向かう。手荷物の中には、不思議なオルゴールが入っている。このオルゴールの修理の為の旅行。どんな物語が待っているのだろうか。

列車に揺られ、山響町の駅に到着した共鳴者。時刻は12時過ぎになっている。列車を降りると、都会とは違う澄んだ空気が、共鳴者を包み込む。少し遠方に見える山から運ばれてくるのか、微かに木々の香りがする。

駅舎は古いレンガ造り。モダンな雰囲気漂わす構内を走る線路は1本だけ。この山響町が長閑な田舎町であることが伺える。

駅を出て真正面には、小さなロータリーがある。道行く人はまばらだが、時折観光客らし、大きな荷物を背負った人の姿も見かける。そんなロータリーをはさんで駅の向かいには、少し大きな木造の建物。その脇には広めの駐車場があり、「道の駅さんきょう」と書かれた大きな看板が立っている。

この地域の観光の拠点。町の情報を得るならうってつけの場所だ。共鳴者は道の駅へと向かうことができる。

道の駅に入ると、目に入るのは秋らしい栗やさつまいもなどの野菜や果物。この地域で作られた漬物や土産物を売っている様子だ。いかにも道の駅らしき光景だ。その片隅には、観光客向けに地図やこの地域で行われているイベントのチラシなどが置かれているブースがある。

### 観光客向けエリアの調査

まず目に入るのは、大きなモニター。山響町を紹介するPVが垂れ流しになっている。手作り感満載の動画だ。安っぽいフリー音源らしきBGMをバックにナレーションの声が入っている。

#### ▼ナレーションの内容

豊かな自然、花の香りと文明開化の香りが残る町、山響町へようこそお越しくださいました。

明治時代、この町には多くのお雇い外国人が住んでいました。殖産興業、富国強兵を目指した明治政府は、欧米諸国の優秀な技術者達を招き、この町に住まわせました。彼らの取り入れた洋風建築、レンガ造りの建物が今もこの町には残っています。

そんな町の東部にそびえるのは蒼響山(そうきょうざん)でございます。かつて、この町に住んでいたお雇い外国人の一人、カリヨン・ラジアータはこの山から銅や石炭などの鉱脈を発見。山中に採掘場と工場を建設し、この町に多くの恵みと富を与えました。

明治時代、産業の基礎を築き上げたお雇い外国人達が歩んだこの町、山響町。あなたも同じ道を歩んでみませんか。

モニターから目を離し、あたりを見渡すと。観光客向けのガイドマップが置かれている。どうぞご自由にお取りください、とのことだ。

地図を見て、オルゴールの修理・調査に役立ちそうな気になる場所は以下の通りだ。

#### ● 洋食屋「ワルツ」

山響商店街に位置する、人気洋食店。かつて山響町に住んでいたお雇い外国人「カリヨン・ラジアータ」の執事が、1896年に創業。現在は4代目の店主が経営している。

#### ● 骨董屋「メメント・モリ」

山響商店街に位置する骨董品店。明治・大正時代から伝わる美術品の展示や販売を行っている。創業は1910年。

#### ● 時計堂「リコリス」

山響商店街に位置する時計店。時計の販売や修繕に加え、オルゴールや蓄音機の展示・販売も行っている。

#### ● 山響図書館

町営の図書館。通常の書籍に加え、町の歴史に関する文書の収集も行っている。

以上、4か所を全て今日中に回り切ることが出来る。順番は自由。回り切る頃には日は沈み、ホテルのチェックイン時刻となるだろう。

## シーン3：山響町を往く

共鳴者が訪れる場所に応じて、演出を行う。

シーン3-A(p9)…洋食屋「ワルツ」

シーン3-B(p10)…骨董屋「メメント・モリ」

シーン3-C(p11)…時計堂「リコリス」

シーン3-D(p12)…山響図書館



### シーン 3-A：洋食屋「ワルツ」

商店街を歩き、共鳴者は、古びた佇まいの洋食屋にたどり着く。店頭のディスプレイに飾られた食品サンプルは、日に焼けて色あせている。

店内に入ると、既にお昼時を過ぎているせいか、客はまばらだ。内装は古く、年季を感じさせるアンティーク調のテーブルと椅子が並んでいる。モダンな内装を暖色の薄暗いライトが照らしており、店内はセピア色の年老いた雰囲気醸し出されている。そんなお店の厨房の奥から、年老いた男性、恐らく店主らしき人物が出てきて、朗らかに声をかけてくれる。

「いらっしゃい！ ごめんね、今日、ほとんどのメニューが売り切れちゃったんだよ。サービスランチセットしかないけど構わないかい？」

#### ● 店内の情報 「壁に掛けられた肖像画」

壁には、中年の西洋人男性の肖像画が飾られている。スーツに蝶ネクタイの男性であり、文化人なのであろう。写真の傍らには、花瓶に彼岸花が活けられている。

注文を済ませ、しばらく店内で待っていると。店主が料理を運んでくる。食事を楽しんでいる最中、店主が話しかけてくる。

「味はどうか？」

「今日は観光で来たのかい？」

「うち、見ての通り古いお店でしょ。それでも創業から 100 年位経っている老舗だからね！」

そう言いながら、店主は聞いてもいないのに店の由緒を話し始めた。

以下は店主との会話で得られる情報である。

共鳴者のロールプレイを引き出し、上手く提示すること。

#### ● この店について

この洋食屋「ワルツ」の創業は、1912 年。かつてこの町にいた、お雇い外国人の「カリヨン・ラジアータ」の執事であった「藤弦一郎」という人物が開業した。「藤弦一郎」は店主の先祖(四代前)にあたる。

#### ● 壁の肖像画と花瓶について

カリヨン・ラジアータの肖像画。彼の名前「ラジアータ」は彼岸花を意味する言葉。カリヨン自身も、彼岸花が好きだった。

#### ● 共鳴者が持ってきたオルゴールを見せた場合

「これは…、オルゴールかい？ すごく古びているね。どこで手に入れたんだい？」

「箱の表面に、青い薔薇が描かれているね。…そういえば。カリヨンが『ブルーローズ』というオルゴールを作ったという話を、聞いたことがあるね。」

「外箱に青い薔薇が描かれた、『ブルーローズ』というオルゴールを作って、フランスから日本に持ち込んだそうなんだ。」

「そのオルゴールが奏でていた音楽は円舞曲(ワルツ)だったそうでね。うちの店の名前も、それが由来だって。親父から聞いたことがあるよ。」

「青い薔薇の花言葉は『不可能』『奇跡』なんだけれどね。その言葉通り、『二度と作ることができない、唯一無二の奇跡の音色』と言われていたそうだね。」

「でも…。どうしてお客さん達の家で見つかったんだろうね。」

「もしそれが本物なら。何か縁があって、この町に戻ってきたのかもしれないね。」

店主とオルゴールに関する会話を終えた後、共鳴判定を行う。

#### ▼共鳴判定

(強度 = 6 / 上昇 1) ∞ 共鳴感情 : [情景(理想)]

判定に失敗した場合。オルゴールから何故か、安らいでいるかのような感情が伝わってくる。

判定に成功した場合は更に、「この場所は、あの時の面影を感じる」という感情が流れこんでくる。(かつてカリヨンが生きていた時代の面影を残している洋食店「ワルツ」に、ローズが懐かしさを覚えている)

十分なロールプレイが済めば、共鳴者は洋食屋「ワルツ」を後にする。

### シーン 3-B : 骨董屋「メメント・モリ」

共鳴者は、山響町の商店街で、人気のないひととき寂れた店を見つける。店頭の看板には、古びた文字で「Memento mori」と綴られている。

共鳴者が中に入ると、少し埃っぽい香りがする。店内には、壺や動物の置物などが並び、壁には掛け軸、和服など、様々な品がかけられている。どれも色あせ、古びているように見える。

店の奥から、店主らしき年老いた女性が出てくる。のんびりとした口調で、話しかけてくる。「いらっしゃい。ようこそあたしのお店へ。」  
「今日は、観光でこの町に来たのかい？」

「そうかい。ここは見ての通り、古いものを集めて売っているんだけど…。正直、趣味の域だね。今はもう…商売としてはやっていないの。」

「まあ、ゆっくり見て行ってね。何か教えてほしい品物があれば、聞いておくれ。話をするのは大歓迎だよ。」

以下、店内の様子や店主との会話から得られる情報である。共鳴者のロールプレイを引き出し、上手く提示すること。

#### ● この店について

「この店はね、私のお祖父さんから受け継いでいるんだよ。」

「私のお祖父さんは、古い品を集めるのが趣味だったみたいで。その趣味が仕事になったみたいだね。」

「でも、骨董品の販売だけじゃ生きていけないからさ。家具の修理なんかもして、収入を得ていたのさ。」

「壊れても修理をして、長く使ってあげた方がいいって。長く大切にされた物には、魂が宿るって。」

「付喪神なんてね。長い間、人間に大切にされたものにはね、精霊が、魂が宿ることがあるんだって。」

「そんなことを言いながら、物を大事にする仕事をしている人だったよ。」

#### ● 店内の商品を見て

〈鑑定〉〈観察眼〉などの技能を用いることが出来る。

判定に失敗すると、骨董品の中の多くはアンティーク調の美術品が多いことまで分かる。

成功した場合、上記の情報に加えて、骨董品の中に、時計やオルゴールといった機械類は全く存在していないことが解る。

- オルゴールは置いていないかと尋ねた場合  
「オルゴールねえ…。昔はこの町にオルゴールや蓄音機といった品々がいっぱいあったらしいけどねえ…。明治、私も生まれていないような時代のことだけどねえ。」

「そりゃあ、今の時代に残っていたら凄く素敵だったでしょうねえ。」

「詳しくは知らないけどね、このお店ができる前…それこそ明治時代の終わりが近づいていた頃らしいけど…。この町で大きな暴動があったの。」

「交番とか、工場とか、いろんな場所が怒った人々に襲われて、焼かれちゃったんだって。」

「その時に、この町に来ていた西洋の人たち、いわゆるお雇い外国人だね。その人たちが持ってきていた貴重な品や工芸品、その中にオルゴールや蓄音機もあったんだけど…全部炎の中へ消えたらしいね。」

- 共鳴者が持ってきたオルゴールを見せた場合  
「おや、これは…。」

「オルゴールなのかい？ ずいぶんと古いみたいだけど、今も音楽を鳴らすことが出来るのかい？」

「そうかい。残念だねえ。あいにく、あたしは機械のことは詳しくなくてね。修理はしてあげられないよ。」

「この子も、もう一度音楽を奏でたいだろうにねえ。力になれなくてごめんね。」

店主がそう言った瞬間。共鳴者はオルゴールから、何処か温かみを感じる。僅かに感情が流れ込んでくるのがわかる。ここで、共鳴判定を行う。

## ▼共鳴判定

(強度 = 6 / 上昇 1) ∞ 共鳴感情 : [情景(理想)]

**判定に失敗**した場合。オルゴールから何故か、少し喜びの感情を感じる。

**判定に成功**した場合は更に、「そう思ってくれただけでも、嬉しい」という感情が流れこんでくる。

オルゴールから、不思議な感情を読み取った共鳴者に、店主が話しかけてくる。

「それにしても…その子。相当古いオルゴールだねえ。きっと、ずーっと昔はすごく大切にされていたんだから…。ひょっとしたら、そのオルゴールにも、魂や精霊が宿っているのかもしれないね。」

「なんとなーく、そんな気がするんだよ。長いこと、いろんな古いものを見てきたからね。あたしには、そう見えるのさ。」

(実は、店主はブルーローズのことを知らずとも、このオルゴールが特別な存在であることに気が付いており、中に眠る少女の面影を感じ取っている。)

十分なロールプレイが済めば、共鳴者は骨董堂「メメント・モリ」を後にする。

## シーン 3-C : 時計堂「リコリス」

商店街の中に、煉瓦造りのモダンな時計堂がある。しかし、店の扉には「本日は誠に勝手ながら、休業いたします。明日は通常通り、営業いたします。」という張り紙がなされている。(あたりを調べても、特に何も見つからない)

共鳴者は、仕方なく、時計堂「リコリス」を後にする。

## シーン 3-D：山響図書館

共鳴者は町の外れにある、小さな図書館にたどり着く。自動ドアをくぐり中に入ると、天井にまで届きそうな本棚が並んでいる。高い本棚に、ぎっしり書籍が詰まっている。決して広くは無い館内だが、蔵書数はかなり多そうだ。この中からオルゴールなどに関する情報を見つけるのは、至難の業だろう。

図書館で調査を行うと、以下の本を発見することが出来る。かなり分厚く、古い文体で書かれた本であり、理解できるのは概要までである。

### ● 書籍「オルゴールと蒼鉄鉱」(概要)

蒼鉄鉱はその名の通り、青く光り輝く性質を持つ。叩くと涼やかな音を出すことから、かつてはオルゴールの鍵盤部分に用いられていた。民話では、**人の感情や思念を増幅させる鉱石**とされており、この鉱石を用いた物品には、魂が宿るとされている。

日本においては、山響町で明治時代に採掘された記録が残っている。お雇い外国人のカリヨン・ラジアータが、山響町の東部にある蒼響山から採取したという。

(ここまでは、**技能による判定無しで情報を得ても構わない。**)

上記の本に対して、〈洞察〉〈専門知識：歴史〉などの技能で、深く読み進めることが可能であれば、追加で以下の情報を得る。

### ● 書籍「オルゴールと蒼鉄鉱」(概要)

蒼響山は、銅や石炭を採掘する鉱山であった。明治時代に町の産業を支えた要であったが、鉱毒による田畑や人に対する被害が発生。鉱毒事件を引き金に閉山となり、現在は坑道のみが残る。

## シーン 4：彼岸花

探索を終えた共鳴者。残念ながら、今日はオルゴールの修理に役立つような、直接的な情報を得ることは出来なかった。しかし、風情ある町を観光できたと思えば、悪くない一日だったかもしれない。

太陽は既に沈みかけている。そこまで遅い時刻ではないが、秋の日は釣瓶落とし。薄暗い黄昏時となっている。そろそろホテルのチェックインの時間だ。共鳴者が今日の宿を目指し、茜色に染まる町並みを歩いていると。

ふと、道端に咲く紅い花が目に入る。それは彼岸花だ。夕日に照らし出されるそのシルエットは、時折吹く秋風に揺さぶられる。風に揺られるたびに、大きな紅い花を支える細い茎は、今にも折れてしまいそうだ。

そんな夢さを感じる彼岸花を見て、共鳴者に何処からか感情が流れ込んでくる。

### ▼共鳴判定

(強度=7/上昇1)∞共鳴感情：[孤独(傷)]

**判定に失敗**した場合。何処からか、「あの人は…もう散ってしまったのです」という少女の声が聞こえてくる。

**判定に成功**した場合。聞こえた声が、オルゴールから発せられたものであるような気がする。

あたりを見渡しても、声の主らしき人物はいない。道を往く人々は皆、夕日の中で帰路につこうと少し足早に歩いているだけだ。少女なんてどこにもいない。

ロールプレイなどが済めば、共鳴者はホテルを目指し、再び歩き出す。

## シーン4：ホテルのロビーにて

共鳴者はこの町唯一の宿である、ホテル「クロックワーク」にたどり着く。

レンガ造りのホテルの扉をくぐり、ロビーに入ると。天井につるされた古そうなシャンデリアが、何処か温かみのある光で館内を照らしている。照らし出された壁面の煉瓦は色あせており、歴史を感じさせる。

ロビーの片隅にはいくつかの絵画やパネルが壁面に展示されている。どうやら、この町の歴史を紹介しているようだ。

それなりに観光客がいるのか、フロントが若干込み合っている。フロントの傍らには、人の背丈ほどの大きな柱時計が佇んでおり、振り子が左右に揺れ、静かに時を刻み続けている。

共鳴者がフロントで手続きをしようとする、  
「込み合っておりますので、大変申し訳ありませんが少しお待ちください」「順次呼びいたしますね」と告げられる。ロビーで暇をつぶすことが出来る。**ロビー内の展示コーナーと、大きな柱時計の2か所**を調べることが可能。

### ▼ ロビー内の展示コーナーについて

山響町の歴史を紹介する、小さなコーナーだ。100年ほど前の町並みを描いたのであろう絵画や、荒い画質とノイズが撮影した時代を物語る、白黒写真が展示されている。以下、3枚の絵画や写真を見ることが可能。

#### ● 「蒼響山鉱脈」というタイトルの水彩画

坑道だろうか。暗い洞窟のような場所で、逞しい男たちが岩盤をつるはしで砕き、鉱石を運び出している様子を描いた水彩画だ。

〈観察眼〉などの技能に成功すれば、絵画の片隅に、青ざめて苦しそうに倒れている作業員の姿を発見できる。

水彩画の少し下には、解説パネルが展示されている。

#### ★ 水彩画解説パネルの記述

1890年にお雇い外国人のカリヨン・ラジアータが発見した、蒼響山の鉱脈を描いた絵画です。カリヨンは富国強兵・殖産興業を目指す政府指導の下、蒼響山で鉄・銅・石炭などの採掘事業を開始しました。

鉱山の事業は軌道に乗り、カリヨンは豊富な資金を獲得。山中に工場を建設するなど、事業を拡大していきました。

#### ● 枯れた畑の白黒写真

麦か粟らしき植物が生えた田畑の写真だ。ただ、畑にしては生え方がまばらで、茎は弱弱しく垂れさがっており、葉は地面に落ちてしまっている。明らかに枯れている。

〈観察眼〉などの技能に成功すると。遠方に写る山の木々も、枯れているように見えることに気が付く。

白黒写真の少し下には、解説パネルが展示されている。

#### ★ 田畑の白黒写真 解説パネルの記述

町の産業を支えた鉱山事業が動き始めてから1年後。田畑で作物が枯れ、芽を出さなくなりました。町内を流れる河川には、多くの魚の死体が浮かびました。山の木々は、葉を落とし、倒れ朽ちてゆきました。

原因は、鉱山から流出する鉱毒である硫酸銅と、鉱山近郊に建てた工場から出る排ガスでした。蒼響山は資源と富だけではなく、公害問題も生み出したのです。

## ● 瓦礫の山の白黒写真

レンガ造りの道の傍らに、瓦礫が積み重ねられた空き地が写った写真。瓦礫は、煤けたような色合いをしている。

白黒写真の少し下には、解説パネルが展示されている。

### ★ 瓦礫の白黒写真 解説パネルの記述

1895 年。拡大し続ける蒼響鉱山の鉱毒被害に耐えかねた町民が蜂起しました。鉱山の閉山などを求め、交番、町役場、西洋人の住居などが襲撃されました。多くの建物が火が放たれ火災となり、街の至る所に焼け焦げた空き地が生まれたのです。

## ▼ フロントの傍らの柱時計について

2 mほどの大きな柱時計。ゆらゆらと振り子が揺れている。その重厚感から、何かしらの由緒あるものであるということが分かる。ホテルのスタッフに尋ねるなどすれば、由緒を知ることができるかもしれない。

ロビー内の展示コーナーと、大きな柱時計の2か所を見終わると。ホテルのフロントスタッフが「〇〇様。準備が出来ましたので、お手続きをさせていただきます」と声をかけてくる。

ここで、先ほどの柱時計について尋ねることが可能。内容は以下の通り。

## ● フロントの柱時計について

「そちらの柱時計ですか？」

「この柱時計は、かつて山響町に住んでいた機械技師、カリヨン氏の邸宅にあった時計を再現したものでございます。」

「このホテル自体、カリヨン氏の邸宅の跡地に建てられているのですよ。」

ここで〈\*交渉〉〈社交術〉などの技能に成功すると。以下の情報を追加で教えてくれる。

「実は、カリヨン邸は一度焼けていまして。1895 年にこの町で大きな暴動が起きた時に、火を放たれているんです。」

「その際に、これはレプリカですが、この時計の本物を含めた貴重な品々などは全て、燃えているのです。」

「ここだけの話ですが…燃えた邸宅跡ということで、カリヨン氏の幽霊が出るって噂があるんですよ。」

「あくまで噂です。邸宅が焼かれる前に、カリヨン氏は亡くなっておられますから。この土地に因縁は無いはずです。」

## シーン 5：機械仕掛けと過ごす夜

手続きを済ませた後。共鳴者は客室へと足を踏み入れる。部屋には、ベッドにソファと机、壁には掛け時計。加えて、個室のシャワーとトイレが付いている。一般的な客室であり、調べても特に違和感ない。

就寝までの間、夕食や入浴を済ませ、情報の整理や、明日の行動を考えるなどが可能。一通りのロールや行動が済めば、共鳴者は就寝することになる。

因みに、〈検索〉〈電脳〉などの技能で山響町について調べると。オカルトサイトに、「蒼響山に、鉱山の坑道の跡地がある」「跡地には幽霊が出るという噂がある」ということが書き込まれている。

就寝しようと、部屋の明かりを落とした共鳴者。静かな室内に聞こえるのは、自身の息遣いと、時計の針の音だけだ。



明かりを落として、しばらくしてからのこと。  
部屋のどこからか、澄んだオルゴールの音色が  
聞こえてくる。

### ▼共鳴判定

(強度=8/上昇1)∞共鳴感情:[孤独(傷)][情景(理想)]

※ここでは、共鳴表を用いない。

判定に成功したかどうかに関わらず、オルゴールの音色が、少女のハミングのように聞こえる。成功した場合は、ハミングは寂しげな声で、日本語ではない異国の歌を、ゆっくりと口ずさんでいるように聞こえる。

ハミングを聞いた共鳴者がベッドから身を起こし、部屋を見渡すと。ソファの近くにいつのまにか、少女が佇み、穏やかにメロディーを口ずさんでいる。

(共鳴者が身を起こさない場合、少女自ら共鳴者のベッドに近づき、そっとベッドに腰掛ける。)

金髪に小さなハットをかぶり、赤いジャケットと青いドレスを身に纏ったその少女は、澄んだ青い瞳で共鳴者を見つめながら、口を開いた。



「わたくしが見えておりますの？」

そう語りかけた少女の傍らには、オルゴール“ブルーローズ”が置かれている。

「驚かせてしまったのなら、ごめんなさい。怖がらないで。悪気は一切ありませんの。」

「わたくしの名前はローズ。ローズ・アルモニカと申しますの。」

「あなたがこの町にお持ちしてくださった、このオルゴール。『ブルーローズ』に宿っている、精霊のようなものですわ。」

ロールプレイ後、以下の項目「ローズの願い」をすぐに伝える。

(共鳴者の今後の行動指針を、ローズの願いを叶えるという明確なものにする。)

### ● ローズの願い

「あなたに1つ、頼みがあるのです。」

「どうか、あの人に。カリヨン様に、わたくしの音色をもう一度、届けたいのです。」

ローズが共鳴者の目をじっと見る。透き通った蒼いガラスのような瞳が、共鳴者を真剣なまなざしで見つめている。

「あの人との別れは…。突然でしたの。あまり…思い出したくもありませんが。」

ローズのガラスのような瞳から、光が消えたように見える。悲しげな表情だ。

(ここで、共鳴者がカリヨンの死について詳しく尋ねても、ローズはうつむきながら静かに「…いずれ、お話させてください。」と言うだけである)

(〈心理〉などの技能を用いた場合。哀しみ・辛い過去を思い出したくない、という心情を読み取る事が出来る。)

「わたくしを修理して頂いて、あの人の前で。わたくしの音色を奏でていただきたいのです。」

「どうか、お力を貸していただけないでしょうか…。」

共鳴者が承諾すると、ローズは口を開く。

「手伝っていただけるのですね…。ありがとうございます…！」

以降、ローズと自由に会話することが可能。  
以下の項目を参考に、ロールプレイで共鳴者の疑問に答える。

● **ローズの正体について**

ローズの正体は、オルゴール「ブルーローズ」に宿っている精霊。かつて、人間によって大切にされたが故に宿った存在である。日本では、付喪神とされるような存在。人が思いを持って扱うことによって、魔力を得ることができる存在。

ローズは人から長い間忘れ去られ、存在が消えかけていた。しかし、共鳴者の手によって発見され、共鳴者が修理を試み持ち出したことによって、再び魔力を得ることが出来た。

● **「ブルーローズ」と「カリヨン」について**

「わたくしはカリヨン様によって、1870年に作成して頂きました。」

「最初の方は、わたくしも意思を持っているわけではありませんでしたが…」

「本当に大切に扱ってくださって。あの人は毎晩、わたくしの音楽を楽しんでくださって。手入れも欠かす日はありません。」

「そんな日々が続くうちに、いつの間にか、私が意思を持つようになりました。最初は、それこそ今日のわたくしのよう、ほんの少しだけ感情を伝えるぐらいしかできてなかったのですが…」

「大切にさせていただくうちに、徐々に力を増しました。姿を持つようになり…。カリヨン様とその周りの方々には、はっきりとわたくしの姿が見え、会話ができるようになりました。」

● **なぜ共鳴者の家にブルーローズがあったのか**

「ごめんなさい。正直なところ、わたくしもはっきりと覚えておりません。」

「カリヨン様が亡くなって以来、人に触れていただく機会が減ったのですが…」

「わたくしは人に触れていただければ、魔力を得る事が出来ません。」

「ですから、カリヨン様が亡くなってから。わたくしは永い眠りについておりました。」

「あなたに触れていただいて、この町の懐かしい空気を吸って。目覚めたのです。」

「経緯もいつ頃かもわかりませんが…、わたくしが眠っている間に、あなたの家系に移されたようですわね。」

会話を終えると、ローズの姿は、ブルーローズの中へ吸い込まれるように消えてゆく。

今後、共鳴者の近くにブルーローズがあるか、ブルーローズを持ち歩いていれば、好きなタイミングでローズ・アルモニカと、話をすることが可能になる。

## シーン6：時計堂「リコリス」

翌朝。時刻は7時ごろ。共鳴者が目を覚ますと、オルゴールの中からローズが現れる。

「よくお休みになられましたか？」

もし、共鳴者が行き先を決めかねているのであれば、ローズが語り掛けてくる。

「この町のどこかで、時計などの精密機器を作っている場所をご存知でしょうか？ そこならば、わたくしを修理して頂けかもしれませんわ。」

「カリヨン様は、虎杖 伝作という名のお弟子さんを取っておりましたの。その方の子孫が、まだこの町で店を経営しているかもしれませんわ。」

この町にあるのは、時計堂「リコリス」だ。ホテルを出た共鳴者は、ローズと共に向かうことになる。

山響商店街の中にある、煉瓦造りのモダンな建物にたどり着く。店先の看板には、「時計堂『リコリス』」と刻まれている。

店内に入ると、茶色いエプロンを身に付け、銀縁の眼鏡をかけた、70 歳くらいのように見える男性が、出迎えてくれる。恐らく、この店の店主であろう。

「いらっしゃいませ。寂れたお店ですが、どうぞゆっくりご覧になってくださいね。」

ローズが、共鳴者に耳打ちする。  
「かなり熟練の方のようですわね。このお方なら、わたくしを修理していただけるかもしれませんわ。」

共鳴者が修理の話を持ちかけると、店主が応じてくれる。

「修理ですか。承知いたしました。少し品を見せて頂けますか？」

「随分と古いオルゴールですね…。青い薔薇の模様…。いや…まさか…。」

「一つお聞きしたいのですが…。こちらのオルゴール…。ブルーローズではないでしょうか。」

「やはりそうでしたか…。まさか、実物を目にする日が来るとは思っておりませんでした。」

「私の名前は、虎杖 博音と言います。昔この町に、このブルーローズを作られた、カリヨンという方がいらっしゃったのですが…。」

「実は、私の先祖は、かつてカリヨン様から、オルゴールや蓄音機の作成の技法を教わっていた弟子だったのです。ですから、ブルーローズの名は伝わっております。」

「是非とも修理させていただけないでしょうか。お代も頂きません。私もいつか、その音色を聞いてみたいとも思っておりますから。」

共鳴者が修理を承諾すると、店主が言葉を返す。  
「ありがとうございます。」  
「早速ですが、機械部分を拝見させていただきます。」

店主は虫眼鏡をかざし、オルゴール内部の調査を始めた。その様子を見てローズが口を開く。

「なんだか、昔を思い出しますわ。よくこうやって、カリヨン様に手入れをして頂いたものですから。」

しかし、店主は無反応。どうやらローズの声も姿も、店主に感じることは出来ないようだ。  
「うーむ。かなり傷んでおりますね。これは…何の金属を使っているんでしょうか…？」

しばらくすると、店主が顔を上げ、共鳴者に話し掛けてくる。

「今、すぐに修理できるって感じではないですね。内部の錆がひどくて、パーツを変えての修理になるのですが…。」

「どうやら鍵盤部分に、『蒼鉄鉱』という金属を使っているようでして。これが作られていた当時は、良く採掘されていたのですが…。現代では入手できるかどうか…。」

「この町の東部にあります『蒼響山』に鉱山があって、そこから『蒼鉄鉱』が採れたという話を聞いたことがあります。大変かと思いますが…。山を調査して、『蒼鉄鉱』を入手していただけないでしょうか。」

「『蒼鉄鉱』さえ手に入れば、修理は可能です。どうぞ、よろしくお願いいたします。」

共鳴者は時計堂を出て、ローズと共に蒼響山へと向かうことになる。そこまで広くない町だ。15 分も歩けば、蒼響山への登山道にたどり着くだろう。

## シーン7：蒼響山へ

時計堂を出た共鳴者。東にそびえる蒼響山へ向けて町を15分ほど歩くと。麓の登山口へとたどり着く。まだ残暑が残る季節のせいか、共鳴者の他に登山客はほとんどいない。

「鉱山自体は、わたくしも見たことがありますね。登ってみるしかありませんわね。」

登山道に沿って、山道を登ってゆく共鳴者。木々の隙間から、太陽の光が漏れている。登山中、ローズが共鳴者に語り掛ける。

「こんなのは初めてですわ。町を離れ、自然の中を歩くのは、気持ちが良いものですわね。」

しばらく歩くと、涼しげな秋風の中に、花の香りがほのかに香ってくる。木々が開けた場所にでると。あたり一面に、彼岸花が咲いている。

ローズがじっと彼岸花を見つめながら、共鳴者に声をかける。

「あの人は。カリヨン様は…。彼岸花がお好きでした。秋になったら、花瓶に活けておられましたの。」

ローズは更に呟くように話す。その目は、涙で少し潤んでいるようにも見える。

「自慢じゃありませんが…私、オルゴールのことも好きでいてくださったはずですよ。」

「私が今、こうして存在しているのも。あの人がオルゴールを愛してくださっていたから。」

「私の鍵盤、心臓部分を形成している蒼鉄鉱は感情を具現化することがありますのよ。なんでも、強い感情が蒼鉄鉱に流れこむと、新たな怪異が生まれるそうですよ。」

「幸せな感情であれば精霊や妖精を生み出して、負の感情であれば悪魔や怨霊を生み出す。」

「私もそう。あの人のオルゴールを愛する強い気持ちを蒼鉄鉱が吸収。精霊である私を生み出したのですから。」

「そう…愛していてくれたはずですよ。」

そう話し終えたローズは、天を仰いだ。じっと空を見つめている。瞳から涙がこぼれそうなのを留めようとしているのかもしれない。

〈心理〉などの技能を用いた場合。ローズが心の中のわだかまり(かつては愛されていたのに、カリヨンの死後は捨てられてしまったのではないかという想い)を隠していることを見抜くことが出来る。ただ、そのことをローズに尋ねても黙って首を振るだけである。

しばらくの静寂の後、ローズが口を開いた。「行きましょう。今は、蒼鉄鉱を探さないと。」共鳴者とローズは、再び歩き出した。

しばらく登ったあたりで。登山道から外れた脇道を発見することが出来る。脇道と言っても、手入れはあまり行き届いておらず、草木と土が踏み固められていて、辛うじて道とわかる程度のものだ。その奥には、レンガ造りの廃墟らしきものが見える。

「あの廃墟…鉱山に関係する建物の名残ではないでしょうか。行ってみましょう。」

共鳴者とローズがレンガ造りの廃墟に近づくと。天井が崩れおち、レンガや鋼材があちこちに散らばっている。崩落して相当な年月が経っているのか、レンガには苔が生えている。かつて工場の床であったであろう木材を突き破り、木が生えている場所もある。

「これは…当時の工場跡でしょうか…」

「だとすれば、鉱山の入り口はこの近くに…」

そう言いながら、ローズはあたりを見渡している。左右に動いていた彼女の眼差しが、ふと下を向いた。自身の足元に積もった落ち葉をじっと見つめている。

「ここ…この落ち葉。はらってくださいませんか。何かありそうなのですけども…。精霊の私は、自分で触れることができないので…」

言われるがまま、共鳴者がローズの足元の落ち葉を払うと。現れたのは石畳の道だ。かなり風化しているが、落ち葉を払えば道をたどることが出来そうだ。

「この石畳…。鉱山へ続く道だったら素敵なのですけど…」

落ち葉を払いのけ、生い茂る草木をかき分け、長い年月によって浸食されつくした石畳の道を辿ると。共鳴者は切り立った岸壁にぶつかる。そこにはぽっかりと大穴が開いている。穴の淵は古びた煉瓦で囲まれており、人の手が入っているようだ。

「おそらく…これが坑道ですわね。」

中を覗くと、石段が地下へと続いている。石段は風化し、不規則な形に欠けている。その先は暗くてよく見えないが、間違いなくここが鉱山の入り口なのであろう。

「少し不気味ですが…行きますわよ。」

## シーン 8：蒼き鉱石

共鳴者とローズは意を決し、坑道へと入ってゆく。中は暗く、ひんやりとした空気に包まれている。スマホのライト、あるいは持ってきた懐中電灯で照らしながら進んでゆく。

地下水が滲み出しているのか、足元はぬかるんでいる。時折、水滴が天井から滴り落ちる音が坑道内で反響している。

ローズはというと、しゃがみ込み、岩肌を観察している。

「蒼鉄鉱は目立つ鉱石ですよ。明りを照らせば、本当に青く輝くのです。見事な鉱石ですから、あればすぐに気が付くはずですよ。」

しかし、あたりを探してもそれらしきものは見つからない。

「もっと奥にあるのかしら…」

そう言いながら、ローズはずんずんと奥へ進んでゆく。共鳴者もその後に続く(もちろん、共鳴者が先にガンガン行くタイプなら描写を変更)。

どのぐらい奥へ進んだだろうか。暗い坑道内の石段を何段も降りた。かなり地下深い場所まで来たような気がする。

共鳴者が周囲を照らすと。自身の足元で何かがキラリと光った。しゃがんで見てみると。手の親指ほどの長さの、水晶のような結晶が地面から生えている。蒼く光り輝いているが、僅かに紫色を帯びているような気もする。

「それが…蒼鉄鉱でしょうか…」

ローズがそうつぶやいた瞬間だった。

共鳴者が手にしていた照明が突如、チカチカと点滅し、消えてしまう。共鳴者の視界にとって頼りとなるのは、微かに輝きを放つ、精霊であるローズの姿。彼女の周囲だけ、ぼうっと明るくなっている。

「どうしましたの…？」

ローズが不安そうに共鳴者に声をかけると同時だった。洞窟内に突如、冷たい風が吹き始める。場の空気が凍り付くような感覚。足元の結晶から、風が吹くような不気味な音色が鳴り響く。瘴気のような何かが、この結晶に封じられていた何かが、吹き出してきている。



## ▼共鳴判定

(強度=7/上昇1) ∞共鳴感情：[恨み(情念)]

※ここでは、極限共鳴(ハウリング)が起きない。

共鳴判定の成否に関わらず。足元から吹き出す瘴気から、恨みの感情が伝わってくる。地底の闇そのものが吹き出したような黒い瘴気は、次第に形を成し、人影のようになった。

ローズが人影を見て呟く。

「これは…蒼鉄鉾が生み出した怨霊…」

「離れてくださいまし！」

そうローズが叫んだ。しかし、共鳴者の身体は鉛のように重く、動かない。まるで金縛りにあったかのように、その場から一步も動くことが出来ない。目の前の存在に身体がすくんでいるのか、あるいは目の前の怪異によってこの場に縛り付けられているのかもしれない。

共鳴者が逃げようともがいている間も、瘴気は吹き出し続けている。新たに噴出した瘴気は、第二、第三の人影、この地で死んだのであろう怨霊として形を成そうとしている。重苦しい負の感情と、空間そのものに押しつぶされそうな程の重苦しさが坑道内を満たしてゆく。

共鳴者は何とかして金縛りから抜け出し、この場を離れなければならない。

これより、ラウンド進行を開始する。

## ▼ ラウンド進行

### ● 終了条件

1. 金縛りからの脱出(描写は p 21)
2. 3 ラウンド経過(描写は p 22)
3. 共鳴者が逸脱(描写は p 22)

2 つ目の条件は PL には伝えない。3 ラウンドが経過した時点でイベントが発生して終了となる。

### ● 行動順

共鳴者が複数名いるなら、イニシアチブ値は【精神】の値である。

#### I 共鳴者の行動

↓

#### II 怨霊の描写

↓

#### III ローズの描写

という順番である。

### I 共鳴者の行動

金縛りから抜け出そうともがく共鳴者に、ローズが語りかけてくる。

「何か幸せな情景を浮べてくださいまし！」

「昔の幸せな思い出でも、叶えたい夢でも恋心だって構いませんの。幸せな感情で、負の感情を払いのければ、金縛りから解き放たれるはずです！」

共鳴者は負の感情を払いのけるため、幸せな感情を考える。共鳴者は自分のターンで、ロールプレイを交えながら、以下の判定を行う。

## ▼共鳴判定(強度=5/上昇0)

∞共鳴感情：[共鳴者が考える幸福な感情]

※ここでは、極限共鳴(ハウリング)が起きない。

共鳴判定に成功すれば、

成功したダイス数÷2(小数点切り捨て)

の値だけ〈∞共鳴〉レベルを下げるができる。なお、〈∞共鳴〉レベルが4以下になれば、金縛りからの脱出となる。

### II 怨霊の行動

蒼鉄鉾の結晶から現れた怨霊は、暗い影を揺らめかせながら、負の感情を血のようにドクドクと吹き出し続ける。共鳴者は、吹き出した感情が纏わりつき、締め付けられるような感覚に襲われる。



共鳴者のターンが終わるたび、以下の共鳴判定を起こす。

#### ▼共鳴判定

(強度=7/上昇1D2) ∞共鳴感情：[恨み(情念)]

※ここでは、極限共鳴(ハウリング)が起きない。

共鳴判定に成功すると、各ラウンドで、以下の感情が伝わってくる。

1. 「息が出来ない。苦しい。助けて。」
2. 「どうせ、俺達は使い捨ての道具だ。」
3. 「忌まわしき政府の役人どもめ。」  
「お前たちも引きずり込んでやる」

### III ローズ・アルモニカの行動

ローズは怨霊の方を向いて目を閉じ、祈るように手を組んでいる。そんなローズの背後にはオーラのようなものが蒼く輝きはじめている。

判定は特に行わないが、各ラウンドで、以下の描写を行う。

1. ローズが小声で何かを唱えている。ローズの周囲が、僅かに蒼く輝いているようにも見える。
2. ローズの周囲に、蒼い光の粒子がダイヤモンドダストのように浮き、瞬いている。怨霊の生み出す闇に対して、抗うような輝きだ。
3. ローズが宙に浮き、ローズ自身が蒼く輝いている。周囲の岩盤から、蒼い光の粒子が飛び出し、ローズの中へと入ってゆく。洞窟内の僅かな蒼鉄鉱の力を吸収しているのだろうか。

ラウンド終了時の描写は、以下の通り。

#### ● 金縛りから脱出してラウンド進行を終了

幸福な情景を思い起こし、自身から負の感情を払いのける。共鳴者の強い感情が、届いたのだろうか。足元にあったはずの蒼鉄鉱が宙に浮かび上がる。

突如、透き通った金属音が鳴り響き、蒼鉄鉱から眩い閃光が放たれる。その光から、どこか感情が満たされるような感覚がする。

閃光が収まると。共鳴者を縛るような感覚は消え、怨霊は姿を消している。暗い洞窟内で、淡く輝く蒼鉄鉱がローズと共鳴者の姿を照らしている。

「○○(共鳴者)さん の幸福な情景・感情が、蒼鉄鉱に共鳴しましたのよ。」

「さあ、その眩い原石を手にとってくださいまし。」

ローズに囁かれ、共鳴者は宙に浮かぶ蒼鉄鉱を手取る。手触りはまるで金属に触れたよう。ひんやりと心地よい感覚が伝わってくる。

「小さな結晶ですけど、差し支えありませんわ。オルゴールのパーツは凄く小さいですから。それに…」

「小さくても、とても大きな力を発揮する鉱石なのですから。」

感情を増幅させ、ときには怪異すらも生み出す。そんな神秘性を持つ蒼鉄鉱を入手した共鳴者とローズは、坑道の出口を目指して歩き出すだろう。

シーン9 (p23)へ移行する

● 3 ラウンド経過してラウンド進行を終了

共鳴者が幸福な情景を思い起こしても、怨霊から吹き出す負の感情が、周囲の空気を重く暗く塗りつぶしてゆく。このままでは、怨霊に自分の思考すらも塗り替えられてしまうかもしれない。そう思った矢先。

少女のハミングが聞こえてくる。宙に浮かぶローズが、歌を口ずさんでいるのだ。その歌に共鳴するように、地に埋まっていたはずの蒼鉄鉱も宙に浮かび始めた。突如、透き通った金属音が鳴り響き、蒼鉄鉱から眩い閃光が放たれる。その光から、どこか感情が満たされるような感覚がする。

※この時点で〈∞共鳴〉が8以上であれば、  
〈∞共鳴〉レベルを7まで減少させる。

閃光が収まると。共鳴者を縛るような感覚は消え、怨霊は姿を消している。暗い洞窟内で、淡く輝く蒼鉄鉱がローズと共鳴者の姿を照らしている。

「今の歌は、あの人がよく口ずさんでいた歌ですの。私の幸せな記憶が、蒼鉄鉱に響いたようですわね。」

「さあ、その原石を取ってくださいまし。」

共鳴者は宙に浮かぶ蒼鉄鉱を手取る。手触りはまるで金属に触れたようだ。

「小さな結晶ですけど、差し支えありませんわ。オルゴールのパーツは凄く小さいですから。それに…」

「小さくても、とても大きな力を発揮する鉱石なのですから。」

感情を増幅させ、ときには怪異すらも生み出す。そんな神秘性を持つ蒼鉄鉱を入手した共鳴者とローズは、坑道の出口を目指して歩き出さる。

シーン9 (p23)へ移行する

● 共鳴者が逸脱してラウンド進行終了

なだれ込む負の感情が共鳴者を埋め尽くしてゆく。痺気がまとわりつき、酷い耳鳴りと吐き気と悪寒、自分が自分でなくなるような感覚に襲われる。共鳴者は意識を失い、その場に倒れてしまった。

どれぐらいの時間が経ったのだろうか。共鳴者は意識を取り戻す。どうやら自分は、坑道の中で仰向けに寝かされているようだ。不安げに、ローズが共鳴者の顔をのぞき込んでいる。目を開けた共鳴者を見て、ローズがほっとため息をついてから共鳴者に声をかける。

「良かった。お目覚めになりましたね。」

「本当にごめんなさい。危ない目に合わせてしまって。」

「怨霊は、私が鎮めました。」

「少し、私の力を分けて差し上げますから。少しだけ、じっとしててください。」

そう話したローズの体が光を帯び、蒼い光の粒子が共鳴者へと流れ出す。心が安らぐような感覚がする。

※〈∞共鳴〉レベルを7まで減少させる。

身体に力が戻り、共鳴者は起き上がることが出来る。ふと足元を見ると、蒼鉄鉱の結晶が地面に転がり落ちている。先程の輝きは失われ、鈍さすらも感じるが、微かに蒼く輝いている。

「さあ、原石を手にとってくださいまし。」

ローズに囁かれ、共鳴者は宙に浮かぶ蒼鉄鉱を手取る。手触りはまるで金属に触れたよう。

「小さな結晶ですけど、差し支えありません。私のパーツは凄く小さいですから。」

そう話すローズの姿は、何処か儚げに、姿がおぼろげになっているようにも見えた。

(共鳴者を助けるために力を分け与えた結果、ローズ自身の力が失われている。)

感情を増幅させ、ときには怪異すらも生み出す。そんな神秘性を持つ蒼鉄鉱を入手した共鳴者とローズは、坑道の出口を目指して歩き出す。

シーン9 (p23)へ移行する。

今回のラウンド進行で共鳴者の逸脱によって、ラウンド進行を終えた場合。エンド分岐に影響を与えるので、DLは把握しておくこと。

## シーン9：蒼き泉

※シーン9は、カリヨンの死とその背景・ローズの想いが語られるシーンである。そのため、ロールプレイが中心となる。ローズだけが淡々と語ることはないよう、上手く共鳴者の応答を引き出すこと。また、このシーンに限ったことではないがセリフは一例であり、臨機応変に改変することを推奨する。

暗い坑道から出た共鳴者とローズ。山の木々が香るそよ風と、鳥の鳴き声が共鳴者を出迎える。蒼響山の自然が、恐ろしい体験から何とかここまで戻ってこられたという安心感を与えてくれる。木漏れ日に照らされたローズが、共鳴者の方を向いて話しかけてくる。

「この蒼響山の下りは、近道がありますの。」

そう話したローズは一呼吸おいて、空を仰ぎ見る。しばらくの静寂の後、ローズは小さく頷いた。まるで何かを決心したように。

「道中で、お見せしたい場所もありますの。」

か細い声で話しながら、ローズは共鳴者に背を向けて歩き出した。その足取りは錆びた歯車のように重い。本当はその場所に行きたくないのだろうか。だが、彼女の歩みは止まることはない。秋の林道をゆっくりと進んでゆく。

しばらく歩くと、木々が開けた場所にたどり着く。そこには息を呑むような美しい光景が広がっていた。小さな蒼い泉だ。蒼みがかった水

面に日光が反射し、サファイアのように輝いている。水は澄んでおり、水底に沈んでいる石や朽木がくっきりと見える。これほどまでに蒼く、透き通った水はこの場所以外に存在しない。そう思えるほどの美しい光景だ。

「美しい泉ですわよね。蒼くて濁りの無い水。」  
「何故、この泉が濁りなく透き通っているのか。ご存知でしょうか？」

そう話しながら、ローズは泉のそばで朽ちた倒木に腰掛けた。俯き、蒼い泉を見つめながら話を続ける。

「この泉には蒼い毒素、硫酸銅が含まれているのです。触れれば皮膚が爛れます。飲めば命も危ないでしょう。」

※硫酸銅は、水に溶解すると青い水溶液になる性質で知られる。史実では、足尾銅山鉱毒事件を引き起こした原因となった物質としても知られている。

「この泉は…鉱山から流れ出た鉱毒によって生まれた負の遺産です。」

「…お話しても良いですか。この町に眠る暗い歴史について。そして…あの人、カリヨン様の死についても。」

俯いていたローズは顔を上げ、共鳴者の方へと向き直った。その眼差しは凜としているものの、どこか悲しさも感じられる。

「今から 150 年ほど前。カリヨン様と私は、山響町にやってきましたの。」

「カリヨン様は政府に雇われた機械技師。工場の設計などを仕事にされていたのですが…。」

「ある日、この町の蒼響山に眠る資源、鉄や銅を発見されたのです。政府の方々はすぐさま、鉱山として採掘ができる状態にするようカリヨン様に命じましたわ。」

「それから、町の方々を雇って採掘ができるように工事をして…採掘が開始されましたの。」

「鉱山のお仕事動き出してからしばらくは…それこそ町中が薔薇色に彩られたようでした。」

「政府から町にお金がかなり入ってみたいで…  
いくつもレンガ造りの建物が立って、町のあち  
こちにガス燈が建てられて…。まさに文明開化  
の花が咲きましたの。」

「でも…鉾山に咲いた薔薇の花には、棘があり  
ましたの。」

「ほら。ホテルでご覧になったでしょう？ 鉾山  
から町に毒が漏れ出ているのです。」

「田畑は枯れて芽を出すことはない。川魚が腹  
を上に向けて浮かぶ。葉を落として朽ちてゆく  
山の木々。倒れゆく鉾山で働く人々…。」

「今でこそ、蒼響山はかなり元の自然に戻って  
いますけれど…この泉はまだ毒素を溜め込んだ  
まま。生き物が住むことすらできないから、濁  
らず透き通っているのです。」

泉の淵を見ると、砂利が広がっている。この一  
体だけ木々が開けているのも、100 年以上経過  
した今でも、泉の毒で植物が生えることができ  
ないからなのだろう。

「毒の被害が広がるにつれて…カリヨン様に対  
する町の人々の風あたりは強くなりました。」

「田畑を返せ。お前のせいで夫が病に倒れた。  
忌まわしき西洋人は出てゆけ。酷いお声を聞く  
ようになりましたの。」

「もちろん、カリヨン様もじっとしていたわけ  
ではありませんのよ。田畑や山の枯れる原因が  
鉾山だと突き止めてからは、政府の方々に鉾山  
事業を止めるように訴えておられました。」

「ただ…政府の方々は聞き入れてくれなかった  
ようですわね。お国の軍隊を強くする為、お  
国を豊かにするためには、鉾山を止めるわけに  
はいかないと。」

「あの人は…町の方々と政府の方々の板挟みに  
なっていたのです。」

「鉾山が動き始めてから 5 年ほど経った…ちょ  
うど今頃。あの人が好きだった彼岸花が、町の  
あちこちに咲いている秋の日のこと。」

「鉾山の近くの泉。まさにこの泉です。鉾山の  
作業員のお一人が…見つけたのです。」

「泉にうつ伏せで浮かぶ…あの人の亡骸を…」

「酷く殴られた跡が後頭部にあって…。お身体  
は硫酸銅で爛れて…酷いお姿だったそうです。」

そこまで話すと、ローズは瞳から涙をこぼし  
始めた。泣きながらも、話を続ける。

「そのことを聞いてから日々の記憶は…ほとん  
どありませんの。」

「カリヨン様が亡くなってから。音楽を奏でる  
ことも、感情を込められることも無くなった私  
は、徐々に力を失いました。」

「長い、長い眠りについておりました。あなた  
が私を起こしてくださるまで。」

「その間に。経緯はわかりませんが、あなたの  
先祖の手に渡ったようですわね。」

ローズは大粒の涙を流しながら、更に続ける。

「…私は。忘れ去られたのでしょうか。捨てら  
れて、売り払われてしまったのでしょうか。」

「どうして。どうして山響町に。カリヨン様の  
お近くにいられなかったのでしょうかね。」

ローズは声を上げることもなく、静かに泣き  
続ける。気がつけば、彼女の頬を伝う雫に、西  
から射す橙色の光が反射して煌めいている。山  
にいる間に、夕刻が迫っていたのだ。橙色に染  
まり始める空を見たローズが、涙を拭って顔を  
上げた。

「ごめんなさい。なんだか暗いお話をしてし  
まいましたわね。」

「行きましょう。折角、鉾石を見つけていただ  
いたのですもの。」

## シーン 10：継承されたもの

ブルーローズと蒼鉄鉦を持って、再び時計堂「リコリス」を訪れた共鳴者。登山を終え、ここにたどり着くころには、すっかり日は暮れているだろう。中に入ると、時計堂の店主が出迎えてくれる。

「ご苦労様でした…。」

蒼鉄鉦を見せると、店主は驚きながら話す。

「なんと。ここまで純度の高い蒼鉄鉦がまだ眠っていたとは…。早速、修理をさせて頂いても宜しいでしょうか？」

「ここまで純度が高ければ、鉦石を溶かさずそのまま加工できますね。2時間ほどお待ちいただければ、完成いたしますよ。」

「よろしければ、奥でお待ちになられますか？お茶とお菓子を召し上がってってください。」

共鳴者は控室に案内される。柔らかいソファに座りながら、お茶とお菓子を楽しむ事が出来る。ゆったりとした時間が流れる中。ローズが共鳴者に話しかけてくる。

「…いよいよ、ですわね。まさか本当に修理していただける日が来るなんて。思いもしておりませんでしたわ。」

「昔は…。あの頃は…。山響町のあちこちで、悪い噂、わたくしのようなオルゴールを、忌み嫌う方々がたくさんいらっしゃったのです。」

「枯れる山と田畑は、西洋の呪術による仕業という迷信が広がってしまっ…。」

「オルゴールの高音は脳を振動させ、精神を蝕み病に陥らせるだとか、西洋人はオルゴールで鉦山職員を死に至らしめ、その恨みを原動力に機械を動かしているなんて…。」

「あの頃はまだ、科学よりも魔術や呪いの方が信じられていましたからね。ほら、カメラは人の魂を奪うって、お聞きになったことはありませんか。あれと同じです。」

「まあ…。今はこうして、大事に修理して下さいの方がおられます。あなたのように、私のために動いてくださる方も。」

「今は…。幸せな時代なのでしょうね。」

ローズとの会話を終えて、1時間半ほど経過した頃。店についた頃には微かに残っていた夕日の明るさはすっかり消え、外は真っ暗だ。部屋の扉がノックされ、店主が中に入ってくる。

「あと少しで完成です。もうしばらくお待ちくださいね。」

「実は…。完成前に少しお話しておきたいことがあります。」

「蒼鉄鉦について山で調べていただいている間に、私のほうでも調査をしておりました。」

「私の先祖はブルーローズを作ったカリヨン様の弟子、虎杖 伝作という方です。その方が残っていた資料が、この時計堂の倉庫に眠っていたのです。」

「そこに、ある事実が綴られておりました。何故この町にブルーローズが引き継がれていなかったのか、何故町の外にあったのかについて。」

「かつてこの町では、オルゴールは畏怖の対象とされていた時代がありました。」

「1895 年ごろ。ホテルでご覧になったでしょう。この町で鉦毒被害が蔓延しました。100 人を超える方々が亡くなったと伝えられております。」

「そんな状況下で、オルゴールに関する迷信が生まれました。『オルゴールの高音は脳を振動させ、精神を蝕み病に追い込む』と。」

「そんな迷信の中で…。町民達の恨みを買ったカリヨン様は何者かに暗殺されました。犯人は現代まで明らかになっておらず、恨みを持った町民の犯行とも、鉋毒の情報が広がることを恐れた政府による口封じともされています。」

「カリヨン様が無くなった年の冬。この町で大きな暴動が起きました。『忌まわしき西洋人どもの呪術を追い出せ』という標語のもと、鉋山の閉山などを求め、交番、町役場、西洋人の住居などが襲撃され、火が放たれました。」

「もちろん、カリヨン様亡き後の邸宅も例外ではありません。押しかける民衆が火を放ったそうです。」

「そのような中で、弟子の虎杖 伝作は。カリヨン様は何よりも大切にしていたオルゴール。ブルーローズだけでも守ろうとされたようです。」

「カリヨン様の執事であった、藤 弦一郎という方と協力して、燃え盛るカリヨン邸からブルーローズを救出。町民の目から逃れるため、町の外に運び出したそうです。」

「その後。町外の虎杖 伝作の友人にブルーローズを預けたそうです。」

「友人の名前は伝わっておりませんが…。おそらく、あなた(共鳴者①)の先祖にあたる人物なのでしょう。」

「100 年以上前に、この町を離れたブルーローズですが…。今こうして、この町に帰ってこられて。そう思うと、感慨深いものがあります。」

「さて、それではもう少しだけ。作業をしてまいります。」

店主が部屋を出てから、ローズが口を開く。  
「私を、忘れ去っていた訳じゃなかった。売り払われた訳でもなかった…。私を守るために、他の町に…。」

「カリヨン様にも、お弟子の伝作さんにも、執事の弦一郎さんにも、何も恩をお返しすることが出来ませんでした…。感謝しなくては、なりませんわね。」

半刻ほど経過してから。部屋の扉がノックされ、店主が中に入ってくる。

「お待ちせいたしました。完成です。」

「昔、祖父からオルゴールの製作法について教わっていてよかった。きっとこの日の為に伝えられたのでしょうか。」

部屋の机の上に置かれたブルーローズ。外箱は古びた木材の雰囲気を出しながらも、きれいに磨かれ、ツヤがある。青いバラの模様も、一層輝きを増している。

店主が口を開く。

「どうぞ、開けてごらんになってください。」  
中を開けると、美しく輝く機械部分が見える。音を出す鍵盤部分は、蒼く美しく輝く。

## ▼共鳴判定

(強度=8/上昇0) ∞共鳴感情：[希望(理想)]

※ここでは、共鳴表を用いない。

判定の成否に関わらず。蒼く輝く鍵盤から、「音色を、大切な人に届けたい」というローズの願いが伝わってくる。トリプル以上で判定に成功した共鳴者はこのシナリオ中、共鳴感情の[希望(理想)]を取得する。

時計堂の店主が、共鳴者に声をかける。

「1870 年…。150 年以上前につくられたオルゴールが現代に蘇らせることができた。」

「このオルゴールをこの町に連れて帰ってきてくださって、ありがとうございます。」



## シーン 11：鎮魂歌

店を出ると。日はすっかりと暮れており、時計堂以外のほとんどの店は既に店じまいを終えている。街灯に照らし出されながら、ローズが共鳴者に話しかけてくる。

「ここまでして頂いて、本当にありがとうございます。これだけで十分幸福な私ですが…もう1つだけ、我が儘をきいてくれませんか。」

「カリヨン様に、この音色を届けるお手伝いをしてほしいのです。毎晩、私の音色を聞いてくださっていたあの人に。今宵もう一度、音色を届けたいのです。どうか、お願いします。」

「私自身で、ゼンマイを巻くことは出来ませんから…。」

共鳴者が承諾すると、ローズはお辞儀をする。  
「ありがとうございます。では…。」

共鳴者とローズの周囲に、蒼い光の粒子が舞い始める。天の川のように光の帯となり、共鳴者を包み込んでゆく。身体が浮くような感覚がする。まるで、星空に浮かび上がるようだ。

「精霊ですもの。力を取り戻せば、魔法ぐらい使えますのよ。」

ローズの声が聞こえると同時に、光の粒子が輝きを増し、視界は蒼一色となった。

光が徐々に弱まり、視界が開けてくる。カサカサと木の葉が風で擦れる音がする。ひんやりとした空気からは、ほのかに木のにおいがする。

いつの間にか共鳴者は、月光が差す山林の中にいる。目の前には、少し木々が開けており、小さな泉がある。水は蒼く澄んでいて、差し込む月光が湖底にまで届き、水底の石を照らし出している。ここは蒼響山、カリヨンが命を落とした蒼い泉なのだろう。

泉にローズが語り掛ける。

「カリヨン様。戻って参りましたわよ。」

声をかけた途端だった。泉の中央に、何かが浮かんでいるように見えた。それは真っ赤な花、彼岸花だ。水面から真っすぐに、彼岸花が伸びている。今にも折れてしまいそうな細い茎の上に、真っ赤な花を咲かせている。

何処からともなく冷たい風が吹き、彼岸花の花びらが散る。ひらひらと水面に花びらが浮かぶ。浮かぶ花びらから、紅い何かが水に染み出ている。ちょうど、水面に血を落とした時のように。月光に照らされた蒼い水面が、徐々に紅く染まってゆく。

### ▼共鳴判定

(強度=8/上昇1) ∞共鳴感情：[哀しみ(情念)]

※ここでは、共鳴表を用いない。

共鳴判定の成否に関わらず。紅く染まった水面から、低くしわがれた男性の声が聞こえる。外国語で何を話しているのかはわからない。ただ、語調は強く、激しい怒りと哀しみが伝わってくる。何故、自分が恨まれなければならなかったのか。何故、自分が殺されなければならなかったのか。長い年月で慈しみや愛を忘れ、苦しみと哀しみの感情だけが共鳴者を襲う。

共鳴者は流れ込むカリヨンの負の感情に、今にも意識が乗っ取られてしまいそうになる。手が震え、自分の意思に反して、足が勝手に泉へと歩き出そうとしている。そんな共鳴者の耳に、凜としたローズの声が背後から響き渡る。

「しっかりしてくださいまし…！ さあ、今こそわたくしのゼンマイを巻くのです！」

共鳴者はローズの声で何とか意識を保ち、ゼンマイを回そうとする。

これより、ラウンド進行へと移行する。

## ▼ラウンド進行

### ● 終了条件

1. ブルーローズのゼンマイを回しきる
2. 共鳴者全員の逸脱

詳細は P29 を参照

### ● 行動順

イニシアチブ値は【精神】の値である。

#### I 共鳴者のダイス判定

↓

#### II 怨霊カリヨンの描写

↓

#### III ローズの描写

という順番である。

#### I 共鳴者の行動

カリヨンの負の感情に打ち勝ち、ブルーローズのゼンマイを回しきるには、〈\*細工〉〈\*自我〉〈芸術：音楽〉〈根性〉〈★靈感〉などの判定(なだれ込む怪異の感情に打ち勝ち、ゼンマイを回せそうな技能であればなんでも良い)に、合計3回成功する必要がある。

判定に【精神】の値を用いない技能は、負の感情の影響を受け、判定値が-2される。

なお、ブルーローズを所持している共鳴者以外は、ゼンマイを回すことができない。そのかわりに、〈\*自我〉〈心理〉などで判定を行う。成功した場合、カリヨンが落ち着くようなロールプレイを行えば、後述の怨霊カリヨンからの共鳴判定時の上昇値を、1下げることが可能。

#### II 怨霊カリヨンの描写

長い年月、この泉に留まり続けていたカリヨンの怨霊は、慈しみ愛する心、自我すらも失い、共鳴者を泉に引きずり込もうとする。カリヨンの番になる度、以下の共鳴判定を引き起こす。

## ▼共鳴判定

(強度=7/上昇1D3) ∞共鳴感情：[哀しみ(情念)]

※この判定をトリプル以上で成功した場合、次のラウンドで共鳴者の全ての技能の判定値が2減少する。

判定値に成功する度、共鳴者の心が触まれていく感覚がする。手は震え、今にもオルゴールを落としてしまいそうだ。足は意思と反してずるずると引きずるように動き、真っ赤に染まった泉へと近づいてゆく。

#### III ローズ・アルモニカの描写

「大丈夫です。私が付いています。」

ローズがブルーローズを持つ共鳴者に寄り添い、手を支えるようなしぐさを見せる。精霊であるローズに触れることは出来ないはずなのに、不思議とどこか優しい感触が伝わってくる。

「もう二度と、大切な方を失いたくはないのです。」

ローズが淡く蒼い光を放ち、共鳴者を包み込む。泉から湧き出る紅い負の感情に、共鳴者が染まってしまうように。

ローズの番になる度、以下の判定を行う。

## ▼共鳴判定

(強度=5/上昇0)

∞共鳴感情：[愛(関係)] [希望(理想)]

※ここでは、極限共鳴(ハウリング)が起きない。共鳴判定に成功すれば、

成功したダイス数÷3(小数点切り捨て)

の値だけ〈∞共鳴〉レベルを下げる。

※シーン8とは数式が変わっているので注意

判定に成功すれば、共鳴者の心が徐々に和らいでゆく。時折飛びそうになる意識がはっきりとし、再びオルゴールのゼンマイをしっかりと握りしめる。

## ▼ エンド分岐について

シーン 11 のラウンド進行における、エンド分岐は以下の通り。ただし、**シーン 8 のラウンド進行にて共鳴者が逸脱**している場合、**エンドが変化**する。

1. ブルーローズのゼンマイを回しきる  
エンド A(p29)
2. ブルーローズのゼンマイを回しきる かつ、  
シーン 8 にて**共鳴者が逸脱**している  
エンド B(p31)
3. 共鳴者全員の逸脱  
エンド C(p32)

## エンド A：夢叶う

共鳴者は精神を乗っ取られそうになりながらも、ローズに寄り添われながら、なんとかゼンマイを回しきることが出来た。

ゼンマイから手を離すと。ブルーローズが、円舞曲(ワルツ)を奏で始める。共鳴者を襲っていたカリヨンの負の感情は、消えてゆく。

いつの間にか、空が明るくなっている。もうすぐ夜明けだろう。あたりの木々が、地平線から僅かに漏れる陽光に照らされ始めている。

紅く染まっていた泉は、蒼く澄んだ水へと戻ってゆく。水面に、ぼんやりと人影が現れる。徐々に輪郭がはっきりとし、その姿は、生前のカリヨンの姿になった。

「カリヨン様…。」

ローズが声をかけると、カリヨンは静かに水面を移動し、こちらに近づいてくる。腕を伸ばし、ローズの頭に手を置いた。そして、しわがれた声でローズに語り掛けた。

やはり外国語で、何を言っているのかはわからない。しかし、感謝の気持ちを述べていることは、素振りで分かる。

カリヨンがそっと、愛おしそうにローズを抱きしめる。その瞬間だった。東から、今までよりも明るい光が差し始める。日の出だ。日の光に照らし出されたカリヨンは徐々に薄れて、消えてゆく。その刹那、カリヨンは共鳴者の方に頭を小さく下げた。礼を伝えたかったのだろう。

カリヨンの気配はもう無い。泉の傍で佇むローズの前には、一輪の彼岸花が落ちている。それをローズが静かに拾い上げ、祈りを込めるように目を閉じた。穏やかな朝陽が、彼岸花と青薔薇を照らし出す光景は、とても美しい。



しばらくの静寂の後、ローズが目を開き、共鳴者へと歩み寄る。澄み切った蒼い目で共鳴者を見つめながら、口を開く。

「本当に…ありがとうございました。私の夢は、叶いました。」

ロールプレイの後。共鳴者は町へと戻り、山響町を去ることになるだろう。**PL の望む形でシナリオを終える**こと。

シナリオの終え方の一例として、**ブルーローズを故郷であるこの町に置いてゆくか、共鳴者が第 2 の所有者として持ち帰るか**、という分岐を記載しておく。

DL が PL に、共鳴者がブルーローズをどうしたいと願っているか尋ねても良いかもしれない。

共鳴者がこの町にローズを置いてゆく選択をするならば、洋食屋「ワルツ」、骨董堂「リコリス」、時計堂「メメント・モリ」などに預けることが可能だろう。

もちろん、この町にローズを残さず、共鳴者が所有する選択をしても構わない。

共鳴者の選択に応じて、描写とロールプレイを行い、この物語の幕を閉じること。

● ローズを町の何処かへ置いてゆく場合

別れ際に、ローズが共鳴者に尋ねてくる。

「〇〇さん…あなたに…大切な人は、いらっしゃいますか？」

「そうですか…。(もしそんな方が見つかった時には)大事になさってあげてください。」

「いつか必ず、お別れが来ますから。その時に、悔いがないように。」

その後、共鳴者は山響町を後にする。山響町を後にしてから半年ほどしてから、共鳴者の家に差出人が書かれていない封筒が届く。封筒を開けてみると、便箋が1枚と、白い花がかたどられたブローチが入っている。便箋には、次のよう綴られている。

お久しぶりです。お元気でしょうか。わたくしは、元気に過ごしております。

町ではわたくしの音色が評判になっているようです。音色を聞きにお客様がいらっしゃいます。こんな幸せな日々が来るとは、思っておりませんでした。改めて、感謝を申し上げます。ありがとうございました。

お礼といっはなんですが、白い彼岸花のブローチをお送りします。お受け取り下さい。いつかまた、山響町においで下さいね。また会う日を、楽しみにしていますわ。

Rose Armonica

エンド報酬 A-1：白い彼岸花のブローチ

白い彼岸花の花言葉は、「また会う日を楽しみに」。ローズの願いが込められたこブローチは、また会える日まで共鳴者を護ってくれるだろう。

所持していると、共鳴者の MP 最大値が +3 上昇する。

● ローズを共鳴者が所有する場合

山響町の駅で列車を待つ。時折涼しい風が吹き、どこからか落ち葉を運んでくる。そんな中、ローズが話しかけてくる。

「今度は…私があなたの助けになります。」  
「私の夢を叶えてくださったのですもの。あなたの夢を叶えるお手伝いを、させていただきます。」

エンド報酬 A-2：オルゴール ブルーローズ

青い薔薇の花言葉のように、『不可能』『奇跡』に例えられた、美しいオルゴール。いつか共鳴者が奇跡を起こし、共鳴者の夢が叶うように、支えてくれるだろう。

使用時、シナリオ中一度だけ、共鳴者のトリプル成功を、ミラクル成功に変更可能。

自然界に存在しない青い薔薇の花言葉

それは、「不可能」「奇跡」

現代は品種改良によって、青い薔薇は実在するその花言葉は「夢叶う」

赤い彼岸花が咲く中で

再び廻り始めたゼンマイは、少女の夢を叶えた奇跡の音色を響かせながら

エモクロア TRPG「青薔薇と彼岸花の円舞曲」

エンド A 夢叶う FIN

\*\*\*\*\*

## エンド B：夢の跡

共鳴者は精神を乗っ取られそうになりながらも、ローズに寄り添われながら、なんとかゼンマイを回しきることが出来た。

ゼンマイから手を離すと、ブルーローズが、円舞曲(ワルツ)を奏で始める。共鳴者を襲っていたカリヨンの負の感情は、消えてゆく。

いつの間にか、空が明るくなってきている。もうすぐ夜明けだろう。あたりの木々が、地平線から僅かに漏れる陽光に照らされ始めている。

紅く染まっていた泉は、蒼く澄んだ水へと戻ってゆく。水面に、ぼんやりと人影が現れる。徐々に輪郭がはっきりとし、その姿は、生前のカリヨンの姿になった。

「カリヨン様…。」

ローズが声をかけると、カリヨンは静かに水面を移動し、こちらに近づいてくる。腕を伸ばし、ローズの頭に手を置いた。そして、しわがれた声でローズに語り掛けた。

やはり外国語で、何を言っているのかはわからない。しかし、感謝の気持ちを述べていることは、素振りで分かる。

カリヨンがそっと、愛おしそうにローズを抱きしめる。その瞬間だった。東から、今までよりも明るい光が差し始める。日の出だ。日の光に照らし出されたカリヨンは徐々に薄れて、消えてゆく。その刹那、カリヨンは共鳴者の方に顔を向け、頭を小さく下げた。礼を伝えたかったのだろう。

カリヨンの気配はもう無い。泉の傍で佇むローズの前には、一輪の彼岸花が落ちている。それをローズが静かに拾い上げ、祈りを込めるように目を閉じた。穏やかな朝陽が、彼岸花と青薔薇を照らし出す光景は、とても美しい。

彼岸花を持つローズの姿が、透けて見える。徐々に姿が薄れ、陽の光に溶け込みそうだ。

「…どうやら、時間切れのようです。」

「鉱山の中と…カリヨン様の…負の感情に負けないように…私の精霊の力を使っていたのですが…。使い果たしちゃったようですわね。」

そう話しながら、ローズは悲しそうに微笑んだ。ローズは笑顔を崩さず、真っすぐに共鳴者の方へと向き直った。

「お別れです。でも…大丈夫。いつかもう一度、目を覚ましてみせますわ。」

「私の夢を叶えてくれて、ありがとう。」

何処からか、花の香りがする風が吹くと同時に、ローズの姿は消えてしまった。共鳴者の手元には、青い薔薇が描かれたオルゴールが抱えられている。

## エンド報酬 B：オルゴール ブルーローズ

青い薔薇の花言葉のように、『不可能』『奇跡』に例えられた、美しいオルゴール。大切にしていれば、再び少女が語りだすかもしれない。

使用すればシナリオ中一度だけ、共鳴者の MP を 2 回復する。

自然界に存在しない青い薔薇の花言葉

それは、「不可能」「奇跡」

現代は品種改良によって、青い薔薇は実在する  
その花言葉は「夢叶う」

赤い彼岸花が咲く中で

再び廻り始めたゼンマイは、少女の夢を叶えた  
いつかもう一度ゼンマイを回せば

再び彼女は微笑んでくれるのだろうか

エモクロア TRPG「青薔薇と彼岸花の円舞曲」

エンド B 夢の跡 FIN

\*\*\*\*\*

## エンド C：壊れたオルゴール

幾度もゼンマイを己の手で回そうとした共鳴者。ただ、泉からの感情に吞まれ、ついにはオルゴールを落としてしまう。自分の意思に反して、ずるずると足が泉へと動き出す。視界も暗くなり、意識が遠のいてゆく。微かにローズの「いけません…！」

という声が聞こえると同時に、共鳴者は意識を失ってしまった。

ふと、共鳴者は意識を取り戻す。木々の香りが漂っている。どうやら仰向けに寝ているらしく、薄紫色に染まる夜明け時の空が見える。

「良かった…。」

声がする方を見ると、ローズが共鳴者の傍に座っている。その姿は薄れており、何処か朧げに見える。

「カリヨン様は、私の魔力で鎮めました。望んだ形の供養ではなく…消滅させたと言った方が正しいでしょうが…。」

「ほら、言ったでしょう？ 私は精霊。魔法ぐらい使えますのよ…。」

言葉を発するにつれて、徐々にローズの姿は薄れてゆく。このままでは、日の出までに消えてしまうだろう。

「…ごめんなさい。もう、あまり長く話すことは出来ないようです。」

「精霊としての、魔力をほとんど使いきってしまいました。」

「永い眠りに…、つくことになりそうですわ。」

(共鳴者が「再び目覚めることはあるのか」と問いかけると、ローズは寂しそうに笑みながら、「あるかも…しれませんわね」と答える)

「後悔はしていません。」

「むしろ、感謝しています。久々に人とお話が出来て、楽しかったですわ。」

「短い間でしたけれど…ありがとうございました。お元気で…。」

何処からか、花の香りがする風が吹くと同時に、ローズの姿は消えてしまった。共鳴者の手元には、青い薔薇が描かれたオルゴールが抱えられている。もうゼンマイを回しても、奏でることも、語ることもないだろう。

翌朝。山響町を去るため、共鳴者は列車に乗り込む。車窓から景色を見てみると、線路沿いに咲く赤い彼岸花が目に入る。細く、今にも折れそうな茎で、大きな花を支えていた。

季節は初秋。

赤い彼岸花の花言葉は、「悲しき思い出」

廻り始めたゼンマイは、動きを止めた。

悲しい記憶だけを遺して

エモクロア TRPG「青薔薇と彼岸花の円舞曲」

エンド C 壊れたオルゴール FIN

シナリオ終了後、共鳴者はカリヨンとローズの影響が残ってしまい、〈∞共鳴〉レベルの初期値が永続的に1上昇する。

\*\*\*\*\*



## あとがき

このシナリオを手にとってくださり、ありがとうございました。読み苦しい、伝わりにくい部分もあったかと思います。お許してください。

このシナリオは、2022.10.06 に BOOTH 上に公開したシナリオ「青薔薇と彼岸花の円舞曲」をリメイクしたものです。当時は TRPG シナリオを書き始めたばかり。やりたくても、技術的にできないことがありました。

あれから数本シナリオを書き続けて、今に至っております。当時は活かすことのできなかった設定も、今回のリメイクで出し切ることが出来ました。世間のシナリオに比べれば拙いものですが、私の“好き”を出し切ったという点では満足しております。

それでは。ここまで読んでくださった方に、良いセッションが生まれますように。

暁 けーな

### ★オンラインセッション用素材について

下記のサイトから無料で DL が可能です

<https://nn-sound.com/aobara/>



- ・シナリオ本文 PDF
- ・キャラクター 画像素材 2 種
- ・タイトル・イベントスチル 画像素材
- ・シナリオ専用書き下ろし楽曲 5 曲

パスワード「1875」を入力して、ダウンロードしてください

### ▼ スペシャルサンクス

本シナリオの作成にあたり、力をお借りした方々の名前を掲載させて頂いております。

- いとこん 様 X ID(@afrokne)  
シナリオの超重要キャラ、ローズ・アルモニカの立ち絵を描き下ろして頂きました。凄く短期間で仕上げて頂き、本当に助かりました。
- 星音 せのん 様 X ID (@senon\_ptr2)  
なんと、このシナリオ用に 4 曲も仕上げて下さいました。無理を承知でお願いしたのですが、承諾して頂き感謝しております。
- ヨシュケイ様 X ID(@yoshukei\_mini)  
シナリオタイトルに用いた背景、及び青い薔薇、イベントスチル背景などの素材を使用させて頂いております。

### 本シナリオについて

本作品の内容はフィクションであり、実在する歴史上の人物、団体、地名などとは一切関係がありません。

本作品は特定の思想、信条、宗教などを擁護あるいは非難する目的を持って書かれたものではありません。

### エモクロア TRPG

「新約 蒼薔薇と彼岸花の円舞曲」

発行日：2023.12.30

執筆：暁 けーな



質問、感想などございましたら、上記執筆者の Twitter アカウントまでご連絡ください。